



表1 神の存在を信じているか（日本の時系列推移）

単位：％

	1981年	1990年	1995年	2000年	2010年	2019年
はい	38.7	36.9	43.5	35.0	40.8	39.2
いいえ	23.3	20.3	32.4	31.6	28.0	32.4
わからない・無回答	38.0	42.8	24.0	33.4	31.2	28.4

資料) 世界価値観調査サイト (2021.12.3)

対象の世界77カ国について図1に示した。国の並びは「信じている」の割合の大きい順である。日本の数字は時系列データとともに表1に掲げておいた。

「信じている」の割合は最も高いエチオピアの99.9%から最低である中国の16.9%まで大きな幅がある。神の存在感は国によってまことに様々である。

それとともに目立っているのは、神の存在を信じている国民の多さである。90%以上が「神の存在」を信じている国は36カ国と半数近くにのぼっており、95%以上に限っても26カ国もある。26カ国の内訳は、イスラム圏の国が12カ国と最も多く、カトリック国が9カ国、それ以外の途上国が5カ国となっている。

主要先進国であるG7諸国について「信じている」の値を見てみると、高い方から、米国(81.2%)、イタリア(76.2%)、ドイツ(57.2%)、フランス(50.3%)、英国(47.8%)、日本(39.2%)となっており、世界全体ほどではないが、やはりかなり幅が大きい(G7のうちカナダは調査対象外)。米国は主要先進国の中で最も信心深い国であり、カトリック国のイタリアがこれに次ぎ、他方、神の存在感が最も希薄なのは日本である。

しかし、主要先進国は、イスラム圏諸国などと比較すると、全体的には「神の存在」をあまり信じなくなっているとも言える。

さらに、「神の存在」を信じている人が最も少ない部類を確認すると、①韓国、日本、中国といった儒教や仏教の影響が大きかった東アジア諸国(台湾は例外)、②エストニア、チェコなど東欧の旧社会主義国、③オランダ、スウェーデンなど脱宗教化が大きく進んだ西欧諸国の3種類に区分できそうである。

## 神の存在について「わからない」と言えるのは日本人だけ？

しかし、日本の最大の特徴は「わからない」とする人が世界で最も多い点にある。

意識調査一般に関して、日本人は「わからない」と回答する比率が多い点がかねてより指摘されている。意識調査の統計分析の権威である林知己夫は海外比較を含めた国民性調査の長い蓄積から、日本人らしさの特徴として「中間的回答の多いこと」を挙げている。ここで中間的回答とは、「非常によい」と「まあよい」なら、「まあよい」の方の回答、また「どちらともいえない」、「わからない」といった回答を指す。

この点に関して、私は、狭い島国でいさかいをせず同居するため、日本では互いにケンカにならないように、あいまいな言い方をするようになったためと考えているが、風土論的に次のように説明されることもある。

気候学者の鈴木秀夫は、ドイツ人が、わからないという状況が耐え難くて、物事の理解より自分の意見をはっきり持つということを優先する態度をとり、例えば、よく知らないにもかかわらず訊ねられた道をきっぱりした態度で教えたりすることをドイツでの生活で見聞きして驚いたという経験を挙げ、これに対して、日本人は、人間の半断を空しいものとみなす仏教の思想に影響され、理解していることでも自分の理解は不十分なのではないかと感じ、むしろ「わからない」と回答する方がしっくりする気持ちを抱くのだとしている(『森林の思考・砂漠の思考』NHKブックス、p.14～18)。

そして、こうした東西の考え方の違いを気候風土に影響されて生まれたものとしている。すなわち、乾いた大地において水場に向かう道としてどちらかを選ばざるを得ない西洋の「砂漠の思考」に対して、湿潤な自然の中でどちらの道を選んででも生き残れる東洋の「森林の思考」とがあり、日本人は特に後者に親しんでいるためと見なしている。

人間関係に関する設問なら、気を使い合う日本人の特性から説明した方が分かりやすいが、今回の「神を

信じるか」というような問いに関して「わからない」が多いのは風土論的な説明の方が説得的であるように思える。

神を信じるかどうか、またどの神を信じるかをめぐって「文明の衝突」(ハンティントン)が続いている現代世界において、信仰をめぐっての無用の衝突を避け、真の融和と世界の平和に至る道を探るためには、日本人の精神態度がよい手本になると私は思うのだが、どうだろうか。

## 社会主義の凋落が生む宗教回帰；日本も例外でない？

次に、こうした神の存在感に関する世界の状況がどう変化しているかを見るため、図2に、「神の存在」を信じている割合について、X軸に2000年(一部2010年)の値、Y軸に最近の2017年の値を取った散布図を掲げた。対象はどちらの時期にもデータが得られる45カ国である(2000年期には欧州価値観調査の結果を含む)。

ここで2000年期とは多くの国が2000年に調査を開始した調査回を指す(実際には1999～2004年に各国で調査が実施されている)。2010年期、2017年期も同様の表現である。

この散布図の右上端に位置する国は両時期を通じて神の存在感の大きい国(いわば「宗教堅持」の国)、左下の方の国は両時期を通じて小さな国である。

一方、視点を変えて、45度線より左上方向に位置する国は、以前より神の存在を信じる人が増えた、いわば「宗教復活」の諸国であり、45度線より右下方向に位置する国は、以前より神の存在を信じる人が減った、いわば「脱宗教化」の諸国である。そして45度線より距離が離れているほど変化が大きいと判

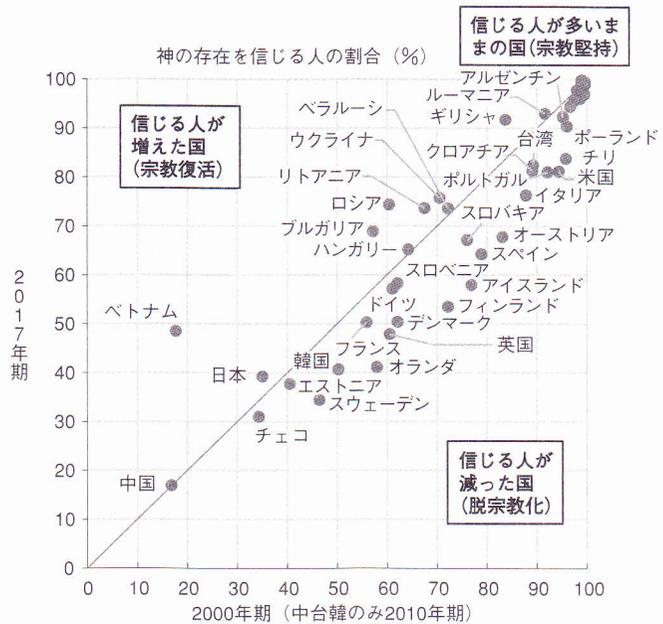


図2 神の存在感についての世界的変容

注) 2000年期と2017年期の両方の結果が得られる42カ国、及び2000年期の代わりに2010年期のデータを使った中国、台湾、韓国(一部2010年)の3カ国が対象。両期ともに割合が高く国名を表記しなかった右上の国は、ジンバブエ、バングラデシュ、フィリピン、ヨルダン、イラン、ナイジェリア、ペルー、インドネシア、プエルトリコ、メキシコ、トルコである。

資料) 世界価値観調査サイト(2021.12.3)、電通総研・日本リサーチセンター編「世界60カ国価値観データブック」

断できる。

両時期共に値が非常に高く、スペースの関係で図中に国名を記せなかったバングラデシュ、フィリピンなど「宗教堅持」の11カ国は、途上国的な性格の強いイスラム圏諸国ないしカトリック国である。

それ以外では、45度線より下に位置する国が多い。特に、主要先進国は日本を除いていずれも45度線より右下に位置している点が印象深い。この点から、世界では脱宗教化が大勢であることが理解できる。

それでは、45度線より左上に位置する「宗教復活」の諸国はどんな国であろうか。国名を見れば分かる通り、ギリシャと日本を除けば、いずれも旧社会主義国(一部現社会主義国)である。社会主義国では「宗教はアヘンだ」(マルクス)とされ、「神の存在」を信じる者は白眼視されていた。ところがソ連崩壊以降の脱社会

主義の流れの中では、そうした考えも後退し、「神」や「宗教」が復活してきているのだと見て誤りないだろう。

旧社会主義国の中でもポーランド、クロアチア、スロバキア、チェコなどは45度線より右下に位置する国となっているが、これらの国では、以前より社会主義思想の感化力が弱かったため、欧米諸国一般と同様の脱宗教化の動きとなっていると解することができる。

45度線からの距離が大きく、宗教復活の程度が大きい国として、ロシアとベトナムが目立っている。2000年期から2017年期にかけて、神の存在を信じる人の割合が、ロシアでは60.4%から74.4%へ、ベトナムでは17.7%から48.5%へと大きく増加しているのである。社会主義思想の影響力が大きく弱まり、ロシアではギリシャ正教が復権し、ベトナムでは仏教やフランス統治下時代以来のカトリックなど種々の既存宗教が復活するとともに、諸宗教が混交した新興宗教も盛んになってきているからと考えられる。

社会主義国だったわけでもないのに、旧社会主義国と同様に宗教が復活してきている点で目立っているのは、ギリシャと日本の2国である（そもそもの神の存在感に大きな隔りがあるが）。ギリシャは社会主義政党が選挙で政権を握っていたこともある、社会主義の影響度の高かった国である。実は、日本も思想的には社会主義の影響が強かったため、今になって、旧社会主義国と同様に、宗教の復活現象が起こっていると解することが可能である。

## 日本の若者層について信仰上の保守化が起こっていると見てよいか？

最後に、世界の主要国において「神の存在」を信じている割合の年齢別結果を対比させたグラフを図3に掲げた。

図2で「脱宗教化」に位置した米国やフランス、スウェーデンでは、かつての日本と同様に高齢者ほど信心深く、若者にとって神の存在感は薄れている。とこ

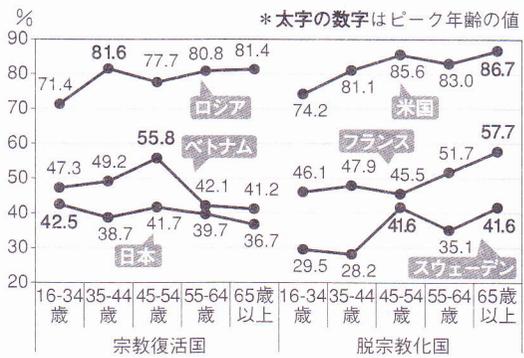


図3 神の存在を信じている人の割合(年齢別、2017年期)

資料) 世界価値観調査サイト (2021.12.3)

ろが、これとは対照的に、ロシア、ベトナム、日本といった「宗教復活」に位置した国では、高齢者ほど信心深くはなく、むしろ若年層や壮年層で最も信心深くなっている。

ただし、ベトナムは45～54歳層で、ロシアでは35～44歳層で最も「神の存在」を信じる割合は高く、「宗教復活」がかなり前から起こっていると見られるのに対して、日本の場合は16～34歳という最も若い層で、同割合が最高となっており、宗教復活が最近の現象だという違いが認められる。ソ連崩壊や開放政策といった社会主義の凋落という体制の激変に直接さらされず、単に思想上の潮流変化の影響を受けているだけの日本では、「宗教復活」に見える現象の到来もやや遅くなったのであろう。

日本では、若年層の自民党支持率が高齢者より高いなどの現象が起きており、これに対して、「若者が保守化している」と解されることが多いが、これは高齢層からの一方的な見方に過ぎない面が大きい。むしろ、そう見える変化は、ここで神の存在感について分析したのと同様に、一時期、勢力が大きかった近代の進歩主義思想や社会主義的思想の影響力が日本で減退してきただけだと見ることができよう。そうした思想の影響をあまり受けていない若者が「神の存在」を信じるようになったのは、ある意味、自然なことなのである。